

# わが心の自叙伝

## 菅原洋一

.....▷15

1964(昭和39)年、アジア初の開催となる東京オリンピックが開かれた。それは日本の戦後にビリー・ホリデイが打たれたと言ってもいい。

わが家にも、幸福の女神とも言わなければならない。長女の歌織が生まれたのである。実は私の出世作となる「知りたくないの」に出合うのが、このすぐ後のことだから、内心、彼女が幸運を連れてきてくれたような気がするのだ。

それまで歌謡曲のレコードを何枚も出したがいずれも不発だった。後々聞いた話だと、最後のレコーディングのチャンスがこの歌だったのだ。それも最初はB面曲だった。

最後のチャンスとしてレコード会社が考え出した策はスター歌手たちとの競作だった。当時ポピュラー界のトップ歌手だった越路吹雪さんは「ラスト・ダ

### 「知りたくないの」

最後のチャンスとして出したレコード「恋心／知りたくないの」のジャケット



ンスは私に」「サン・トワ・マミー」とヒットチャートにのぎ寄せ、さらに今ひとり岸洋子さんは苦節の末、「夜明けのうた」で64年の「日本レコード大賞」歌唱賞に選ばれていた。その2人が競作する歌がタンゴリズムのシャンソン「恋心」だった。その両名の人気を借りて菅原洋

から好きなものを何曲か考えた。妻のアケミが「これがいいわよ」と言ったのが、よくステーションにかけていたカントリー・ソング「アイ・リアリー・ドント・ウォント・トゥ・ノウ」という曲だった。当時日本では「たそがれのワルツ」という題名で、のちに「骨まで愛して」などをヒットさせた城卓矢らが歌っていた歌である。会社も「それでいいんじゃないのか」とOKをくれた。

「恋心」は岩谷時子さんの訳詞で越路さんが、岸さんには永田文夫さんが詞を書くと言おうの、私の詞は「違う人で行こう」ということになった。それが昨年亡くなったなかにし礼である。

「知りたくないの」だったのである。礼ちゃんの訃報のときにこの原稿内でも少しふれたが、どうしても「あなたの過去」の「過去」がメロディーにのらず、訂正を頼んだけれど彼は頑として譲らず、「いや、ここがこの歌のポイントなんだ」と言い張ったのである。この歌が大ヒットするのは、発売されてから2年後のことになるのだが、私にとっては生涯忘れられない一曲である。今でもコンサートでは欠かせない歌だ。

彼はまだシャンソン喫茶で歌手たちに訳詞をしている新人だった。「ではB面も新たに書いてもらおう」と「たそがれのワルツ」にも新たな詞が付く。この「たそがれのワルツ」こそが(すがわら・よういち「歌手

# 最後のチャンスが出世作に